

半数以上であった

特別な問題点を持つ症例は、再企図例、後に既遂に至った例、反社会性人格障害の例、遠方から当地に来て自殺企図をした例、ビザなしの外国人の例、他害行為を伴う例、同朋例などがあった

## 6 新潟大学医学部附属病院における精神科救急医療

細木 俊宏・柴矢 俊幸（新潟大学大学院  
医歯学総合研究科  
精神医学分野）

新潟大学医学部附属病院における平成11年、12年の平日夜間及び休日における精神科受診症例を調査し、現状の把握とその問題点について検討を行った

平成11年、12年の2年間に精神科受診した件数は325人、全科の約1割であった。平均年齢は34.3歳、男女比は約1.2と女性が多かった。外来時精神科診断では精神分裂病圏が33%と最多であり、精神症状のための受診が75%と最も多かった。入院症例の診断は精神分裂病圏が32%と最多であり、人格障害がそれに続いた。入院件数は大量服薬による自殺企図によるものが52%と最も多かった。

以上から新潟大学医学部附属病院における精神科救急外来ではソフトな精神科救急対応件数が最多であるが、入院においては大量服薬による自殺企図など身体管理が必要な症例を中心に対応が行われていた。しかし、身体管理のためのベッド確保の困難、大学附属病院としての機能の未確立など問題が残されている。

## 7 県立療養所悠久荘での精神科救急と実態

丸山 直樹（県立療養所悠久荘  
精神科）

新潟県の精神科救急システムは、平成9年9月から運営されている。その内容は、土・日・祭日・年末年始の日中（9時～17時）対応である。県内を5ブロックに分け、ブロック内での輪番制をとっているが、一定の実績をあげている。当院は、県の

精神医療基幹病院としての任務を担う他に、県央ブロックの輪番病院のひとつとして参加している。

平成12年度での救急実績をみれば、精神科救急システムの枠では、実働日57日/120日、対応件数600件、その内入院した数は13件であった。その他に、平日夜間帯での救急も従来からやっており、これには、県央だけにとどまらず、下越地域からも要請がみられる。これを含めると年間227件の対応数があり、内65件の例が入院をしている。この実態の中にいくつかの問題点がある。（1）身体的医療が優先されるべき例が、搬送されてくる。（2）反社会性人格障害者の受診適応性。（3）夜間救急未整備のため広い地域からの搬送。以上の様な実態と問題点を提供する。

## 8 精神科救急医療の実態

田崎 紳一（県立小出病院  
精神神経科）

小出病院精神神経科は「合併症患者の受け入れと24時間365日の医療体制」を合い言葉に精神科救急医療に取り組んでいる。

それは平成12年1/1から12/31の一年間で、通院患者実人数1372人、一日平均患者数129.8人、外来新患者数457人、年間延べ入院者数503人、夜間・休日の時間外入院は119人、平均在院日数、81.6日という実績として数字に表れている。このような業務の中で金子らは合併症を有する精神科患者さんの救急医療を円滑に進めるためのやり方として「小出式トリアージ」という方法を提案してきている。しかし、救急の現場では「小出式トリアージ」がうまく機能しないことがある。その実例を紹介しつつ精神科救急の全般的な問題点についても言及したい。

## 9 本県の精神科救急医療体制の現状と課題

野口 晃（新潟県福祉保健部  
健康対策課）

本県では精神疾患の急激な発症や精神症状の悪化等により、緊急な医療を必要とする精神障害者

等のために、平成9年9月1日から休日昼間の9時から17時までの時間帯において、県内5フロクの救急指定病院輪番制による精神科救急医療システムの整備を図っている。かかりつけ病院に相談したが、休日で受診ができない場合などに当番病院での入院や外来診療が可能となるもので、平成12年度の実績としては、24か所の救急指定病院の対応総件数が590件で、そのうち外来受診件数は324件、入院件数は133件であった。

平成13年度の夜間精神科救急医療体制の整備については、現在、新潟県精神科救急医療システム連絡調整委員会において後方支援病院のあり方も含め、体制整備に向け検討を行っているところである。

## 第47回新潟大腸肛門研究会

日時 平成13年6月2日(土)  
午後3時～午後6時  
場所 ホテルディアモント新潟

### I. 一般演題

#### 1 大腸癌における p73発現とその臨床病理学的意義

劉 莉莉 崔 星  
佐々木正貴 須田 武保 (新潟大学)  
畠山 勝義 (第一外科)  
坂口 武夫 (同 第一生理)

92例の大腸癌患者を対象とし、手術摘出標本のp73発現を解析し臨床病理学的因子との相関を調べた。p73発現を2様式(small expression, 0-50%)、large expression, >50%に群分類すると、small expressionが78%となった。P73の発現様式は腫瘍の部位、大きさ、程度、段階とは相関せず、腫瘍の再発性で有意な相関を示した。

更に、発現様式と生存期間との間では優位な相関が判明し、large expression群はより短い生存期間となった。結果は、P73は癌の再発に關与すること、P73の解析が術後の臨床経過の予測に有用である可能性を示している。

#### 2 大腸・直腸粘膜下腫瘍に対する超音波内視鏡診断

船越 和博 新井 太  
小堺 郁夫 本山 展隆  
秋山 修宏 加藤 俊幸 (県立がんセンター)  
小越 和栄 (新潟病院内科)  
太田 玉紀 (同 病理)  
斎藤 征史 (斎藤内科 消化器科医院)

超音波内視鏡(EUS)を施行した大腸・直腸粘膜下腫瘍(SMT)23例(大腸6例、直腸17例)について検討した。カルチノイド10例、平滑筋腫3例は全例直腸病変で、他に脂肪腫1例、リンパ管腫4例、血管腫1例、線維腫1例、結核性腸管壁内石灰化肉芽腫1例、診断未定2例であった。19例(82.6%)がEUSにて診断され、2例が内視鏡切除(EMR)、手術にて診断された。EMR症例8例は全例カルチノイドで、手術症例は直腸線維腫1例、カルチノイド2例であった。カルチノイドではEUSにて粘膜下層が確認でき、固有筋層の圧排所見がなく、10mm以下の症例はEMR可能であった。EUSは大腸・直腸SMTの局在および質的診断、治療方針の決定に有用である。

#### 3 Pain Clinicによる直腸肛門痛の治療経験

吉田 鉄郎 飯塚 正仁 (医療法人誠心会)  
笹口 政利 (吉田病院外科)  
木村 亮 (同 麻酔科)

当科には直腸肛門痛を訴える患者が多く来院する。然し激しい慢性の痛みを訴え乍ら原因となる病変が全く認められていない患者もおり、私はこれを(1)突発性直腸肛門部痛とし、更に既往に直腸肛門部に何等かの手術を受け、手術創は充分治癒しているにも拘らず、慢性の疼痛に悩まされておるものあり。これを(2)直腸肛門部術後痛と名